

それぞれの個性が輝く学校

3年1組18番 中村優楽
3年1組25番 藤谷実由
3年2組22番 藤田陽奈子
3年3組31番 松阪奈央
3年3組37番 吉岡梨穂

Keyword:「ジェンダー平等」「LGBTQ」「プライド月間」「個性」「レインボー」

1. はじめに

日本におけるジェンダー不平等の現状は絶えず続いている。世界経済フォーラム(WEF)が6月に発表した146カ国を調査対象とする2023年版のグローバルジェンダーギャップ報告書によると、男女格差が最も少ない国は14年連続で北欧のアイスランドであった。それにひきかえ、日本は146カ国中125位という残念な結果だった。さらに、多様性という言葉をよく耳にする現代社会において、そのひとつの形であるLGBTQについて理解を深めることが求められているだろう。しかしながら、世界中のすべての人はLGBTQについて深く考える機会を設けているのだろうか。

そこで私たちは「誰もが性別に関わらず快適に過ごせる環境とはどういったものなのか」というテーマを設定した。このテーマを設定した理由として次のことが挙げられる。1つめに、学校生活において男女で区別されていることが多いと感じ、改善したいと考えたからだ。たとえば制服について、事実上女子はネクタイ・スラックスを選べるが、男子はリボン・スカートを選ぶことができない。また、部活動でも男女で入部できる部活が限られている。バレー部は女子のみ入部でき、男子は入部できない。私たちはこの規則に違和感を覚えた。2つめに、留学を通して日本と海外の男女平等の違いやLGBTQに関する意識の違いを身近に感じ危機感を感じたからだ。具体的に、留学先では男女平等に対する意識が高く、さまざまな点から“男女平等を実現しよう”という意志の強さを感じられた。ほとんどの家庭が共働きで、女性の社会進出も進んでおり、さらに男性の育児休暇取得率も非常に高い。性別に関係なく、誰もが活躍する社会が成立していると実感した。くわえて、LGBTQに関する意識も高く、街中のいたるところでレインボーカラーを見かけた。

そしてこのテーマに伴い、私たちは身近な存在である「学校」に目を向けた。学校はこのような課題の解決に向けて実践的に取り組むことができる理想的な場所だと考えたからだ。

私たちの研究を通しての目標は「それぞれの個性が輝く学校づくり」である。それぞれの個性が輝く学校は、“誰もが性別に関わらず快適に過ごせる環境”をつくることで成立すると考えた。実際に、「私たちの高校は誰もが性別に関わらず快適に過ごせる環境であるのか」という疑問を追求しながら、「それぞれの個性が輝く学校づくり」を目指して今回の探究を進めた。

2. 序論

ジェンダー平等は世界を掲げて取り組まれている。SDGsではgoal 5 “ジェンダー平等を実現しよう”が掲げられている。また、国際連合によって開始されたジェンダー平等の推進のための連帯運動も行われている。このように世界でジェンダー・LGBTQの呼びかけが行われているにもかかわらず、日本では女性が昇進しにくい、男性の育児休暇取得が浸透していない、同性婚が認められていない、また服装(制服)などにも縛りがあるといった事実がある。

※1日本企業に女性管理職が増えない理由として「出産や育児などライフステージの変化により継続就業が難しくなる」、「根強い男女の役割意識」などが挙げられる。近年男性にも育児休暇の取得が広まっているが、46.2%で半数にも満たない。「世の中に育休を取得しづらい雰囲気がある」、「昇給・昇格等キャリアに影響が出る」といった理由が取得率の低い要因だ。

※2同性婚が認められていないのは、民法や戸籍法にある「夫婦」という言葉が男女による婚姻を前提としており、戸籍の性別が同じ2人の婚姻届は「不適法」として受理されないからである。よって「民法は同性婚を認めていない」という解釈がされている。また、身近な環境として学校を

挙げると、男女で制服が決められている。女子がスラックスを選択できるという例は多くあるが、男子がスカートを選択できる例はごく僅かだ。

※3「男子生徒のスカート着用状況」の記事では、女子のスラックス制服の採用率は7割に対し、男子のスカート制服の着用を許可している学校は3割にも満たないということが書かれている。私たちは、このような男女で分けられている雰囲気を身近なことからなくしていき、個々の個性が認められるようにしたいと考えた。

プライド月間という言葉聞いたことがあるだろうか。プライド月間とは、毎年6月に世界各地でLGBTQの権利を啓発するための活動が行われる期間のことである。プライド月間には、世界中の主要な都市で「プライド」と呼ばれるパレードイベントが行われている。日本でも「TOKYO RAINBOW PRIDE」の名で毎年4～5月にパレードイベントが開催されている。VOGUEやLEGOなど多くの団体・企業も参加しているイベントである。私たちは、この探究活動を行うにあたってプライド月間、プライドパレードを参考にした。

方法:3年生152名にジェンダーに関する7、8項目のアンケートを実施し、以下の2つの仮説を立てた。その後、3年生に実施したアンケートを資料にし、仮説と照らし合わせた。資料をもとにみんなにジェンダー・LGBTQを知ってもらうべく、身近である学校で個性を出していけるよう計画を立てた。

仮説①そもそもジェンダーやLGBTQについて日常、気にしていない人は多いのではないか

仮説②LGBTQの理解度が低いのではないだろうか

3. 本論

次ページのアンケート結果<図1>では、問①で学校生活におけるジェンダー平等に関する意見を聞いたところ、「男子はリボンやスカートを選ぶことができない」、「授業でジェンダー差別について学んでいるにもかかわらず、ふとした部分で差別を感じる」といった意見があった。一方で「女子がネクタイやスラックスを選ぶことができる点に自由を感じる」、「学校はLGBTQに関連する授業を受ける機会が多い」といった肯定的な意見もあった。また、問③からはLGBTQについて日常的に意識していない生徒が6割以上であることがわかった。以上のことから、多くの生徒が学校の授業を通してLGBTQの知識を身につけても日常生活で意識するまでには繋がっていないことがわかる。問⑥で、問⑤「個性を出せる学校のために一日私服登校があったら賛成するか」という質問に対して、そのように考えた理由を尋ねたところ、「さまざまな人の趣味や個性を見れてたのしそう」、「服を考えるのが面倒」などの意見があった。

アンケート内容・結果

①学校生活におけるジェンダー平等に関する意見

②個性が輝く学校は良いと思うか？

はい 97.4%
いいえ 2.6%



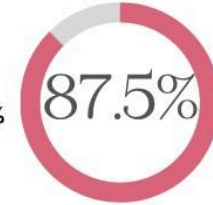
③LGBTQについて日常生活で意識しているか？

している 36.2%
していない 63.8%



④ジェンダー平等に関する学校での取り組みがあった方が良いと思うか？

思う 87.5%
思わない 12.5%



⑤個性を出せる学校のために一日私服登校があったら賛成するか？

はい 48.7%
いいえ 51.3%



⑥⑤ように考えた理由

152件回答

図1

これらのアンケート結果から、私たちは校内のジェンダー・LGBTQに対する意識を向上するために何が出来るか考えた結果、「イベント」の開催を決定した。私たちはそのイベントを1994年から東京で毎年開催されている「TOKYO RAINBOW PRIDE」にちなんで「KOKUSAI RAINBOW PRIDE」と名付け、2023年6月28日に開催した。

このイベントの企画内容として以下のことを挙げる。

- ①LGBTQの象徴であるレインボーフラッグの色(赤・橙・黄・緑・青・紫)のアイテムを普段制服しか着用しない生徒に身に着けてもらう
 - ②ジェンダーやLGBTQを視覚的に感じてもらうために、昇降口近くの階段にオリジナルアートをする(写真1)
 - ③ジェンダーやLGBTQを聴覚的に感じてもらうために、ジェンダー・LGBTQに関する曲を昼食時に放送で流す
 - ④各教室にレインボーフラッグを配り、教室に居てもLGBTQを意識できるようにする
- イベントのまとめとして、イベント開催後に3年生を対象にアンケートを実施した。企画内容②に対しては「ジェンダーについて知る機会になった」、「かわいかった」、「歩く際に邪魔だった」などの意見があった。また、「このイベントを通してジェンダーやLGBTQに対しての意識は変わったか」という質問には「分からない」が50%、「はい」が約44%、「いいえ」が約6%という結果(図2)になった。

アンケート結果

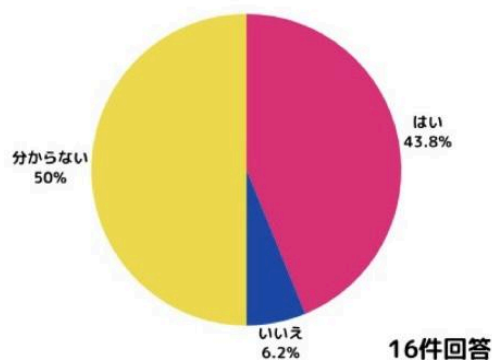


図2

写真1

私たちはこのアンケート結果から、ジェンダー・LGBTQについてまず視覚的に興味を持ってもらえるような掲示やアートを行うことが必要だと感じた。さらに、今回イベントで行った上記に挙げた5つの取り組みよりも、より大規模なイベントを行えば多くの人に関心を持ってもらえるのではないかと考えた。それが、ジェンダー・LGBTQに対しての意識を向上するための第1歩になるのではないだろうか。

4. 結論

私たちは、学生がジェンダーとLGBTQを含む個性を考察するためには、自身を見直し、自分の個性を大事にすることが最も重要だと感じた。そして、ジェンダーフリーを推進し互いに尊敬する学校の環境づくりを考えた。そこで、「KOKUSAI RAINBOW PRIDE」を企画し、個性を引き出す5つの取り組みを提案した。また、男子もリボンやスカートを選択できる制服や、自分の個性をアピールできる服装を提案したが、実行に至ることはできなかった。イベントには改善の余地はあるが、全校生徒がジェンダーについて考える良い機会となっただろう。

今後の課題として、私たちは今回のイベントの理念を忘れず、ジェンダーフリーの推進者になることを目指すことが挙げられる。また、LGBTQについて理解があるからといって、他人のジェンダーを暴露することは避けるべきである。私たちの目指すLGBTQの理解とは、「LGBTQを個性のひとつとして認める」ことである。

現在、多様な考え方が誕生し理解が求められている。私たちは、他人の個性を尊重し、差別がなくなることを願っている。

5. 参考文献・出典

○グローバルジェンダーギャップ報告書https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2023.pdf

※1<https://www.pasonagroup.biz/hint/107#:~:text=%E3%81%BE%E3%81%A8%E3%82%81,%E3%81%E3%81%A9%E3%81%8C%E3%81%82%E3%81%92%E3%82%89%E3%82%8C%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82>

※1<https://forbesjapan.com/articles/detail/63686>

※2<https://www.hokkaido-np.co.jp/article/858505/>

※3<https://news.yahoo.co.jp/articles/fdff20e5b1a195933e952aa3b049bd946a5d1bd>

○プライド月間について

<https://www.instagram.com/p/CeXoi9bOfeF/?igshid=NzZhOTFIYzFmZQ==>

<https://www.vogue.co.jp/article/pride-month-facts-and-actionshttps://tokyorainbowpride.com/>